

1st day  
5.17 Sat.

## 第33回大会 特別報告

■時間 / 16:30 ~ 17:00 ■会場 / 2F 講堂

テーマ●「心の危機」を予防する  
— 医者に見えない教育問題、

教育者が気づいていない医学症状—  
三浦清一郎

2nd day  
5.18 Sun.

## 第33回大会 特別企画

■時間 / 9:00 ~ 11:30 ■会場 / 2F 講堂

2つのミニ講演とインタビュー・ダイアローグ

### 「発想を変える、ボーダーを超える」

若者の混迷と地方の過疎化は日本社会が当面する重要課題です。今回はこの二つの課題に挑戦して、驚異的な実績を挙げて来た若い先駆的実践者をお招きしました。それぞれの活動の成果を検証し、事業を成功に導いた原理と方法論をお聞きする企画です。

われわれは、学校や社会への適応に失敗して苦悩する多くの若者やその保護者の存在を知っています。しかも、学校や行政が提供する相談サービスや社会復帰プログラムがほとんど機能していないことも知っています。佐賀県を拠点として活動する「スチューデント・サポート・フェイス」は、従来発想を根本からひっくり返して、ひきこもりやニートの社会復帰に素晴らしい成果を挙げて来ました。

一方、過疎地における学校の消滅は、子どもや住民の生活を激変させ、地域の活力を一気に低下させます。特に、学校の消滅が「離島」で起こった場合には、島民の生活に激震をもたらします。島根県隠岐の島の「島前高校魅力化プロジェクト」は、廃校寸前の高等学校を見事に復活させ、地域に活力をもたらした希有の事例です。過疎対策も、過疎地における教育問題も、既存の行政による縦割り分業や政治発想で解決できなかったことは、限界集落が1万を超えたというこの数十年の失敗の歴史が何よりの証拠です。それゆえ、離島における高等学校の存続は、あらゆる面で、現代日本の分業システムや常識の「境界」を超えなければならなかった事業です。

佐賀の事例も、島根の事例も、個別の事業原理や方法論を超えて、われわれに、常識を覆して「発想を変える」こと、既存の仕組みに囚われずに「ボーダーを超える」ことを呼びかけているのです。

- 
- 1 若者支援のフロンティアに挑む 谷口 仁史 (40分)
  - 2 過疎地の教育振興に挑む 岩本 悠 (40分)
  - 3 インタビュー・ダイアローグ  
二つの実践の哲学・原理・方法論を聞く (休憩を含んで70分)  
コーディネーター 三浦清一郎